6 漁 場 調 査

1. 目 的

東支那海における調査場は沖縄より近距離にあり漁場も範囲が広いのでその実態を究明し資源量について調査する必要がある。今年は二次海に亘り調査したが悪況蔓わず後期に待つたその概況は次のとおりである。

調査期間

第一次試験　自1961年11月29日至12月　5日

第二次試験　自1961年12月12日ヵ12月22日

使用船舶

調査船　第　南　丸　159.31屯　400HP

調 査 員　　当　真　政　手

2. 魚況の概要

調査海域はLat 26°-29°N、Long 125°-125°Eの範囲内で魚群探知機による魚群反応はかなり見受けられ、漁獲海区の503、504、514、525、524、526区辺では濃密群と思考される魚群映像が点点と現われ好漁を予想したが意外にも餌付や、浮上率が悪かつたり又操業中「イルカ」の群に追散されたり、526区では灯火に集つた始めた鯖群も「カジキ」の出現で一挙に沈下逃逃する等悪条件が続き漁獲は僅少で503区、525区、526区で計約1400kg程しか、水揚出来なかつた。然し乍ら鹿児島入港船は534区の漁場で好漁したのが数度もあつた模様で附近一帯の良漁場の範囲は極く狭かつたものと推察された。当時の水温は20.5℃～21.6℃を示していた。